

①ディレクトフォース

私は東京行きの新幹線の中、ディレクトフォースで笹川平和財団や日本財団の方々からどのような話を聞くことができるのかが待ち遠しかった。以前は財団の人々がどのような活動をしているのかすら知らなかったが、財団のことについて調べて行くうちに徐々に興味が湧いていった。この2つの財団は1つの分野に限らず幅広い分野で活動していて、世界にも目を向けて社会に貢献している。そのような普通には会うことのできない財団の方々とは対話できるとあって若干の緊張はあったが、それよりもそのような方々の話を聞きたいという思いの方が強かった。

ディレクトフォースが行われるという国際会議場に着くと、そこは各国との会議にも使われているらしく、とても広くて素晴らしい環境だった。まず何よりもそのような会場を用意して下さった方やディレクトフォースに向けて準備して下さった方々に感謝したい。

まず初めは笹川平和財団の理事長である田中さんの基調講演だった。田中さんは日本のエネルギー情勢などについて詳しく話して下さった。特に原子力については興味のある分野だった。福島第一原発事故以来、日本では原子力について議論され規制が厳しくなっているが、原子力なしでは日本はやっていけないのが現状だ。田中さんの話によると日本の原子力政策は、原発から出る使用済み燃料を再処理して残ったウランやプルトニウムを燃料に高速増殖炉で使うという方針だが、高速増殖炉である「もんじゅ」で事故が起き、稼働のメドが立っていないという。そのため政府は使用済み核燃料からウランとプルトニウムを取り出すという方針に転換した。しかし青森県六ヶ所村の再処理工場は完成時期が延期され、核廃棄物の最終処分地が決まっていないため実現は難しい。だがこのような課題を解決できるのが、アメリカで開発された「統合型高速炉」だという。この統合型高速炉は放射性の強い物質を原子炉の燃料と一緒に使うため、残った核廃棄物を保管しておくのに約300年しかかからず、一般の10万年に比べて遥かに短いため、最後まで安全に保管できる可能性が高くなるのだ。

基調講演が終わるとグループセッションが始まった。講師と対話する中でよく耳にしたのが「グローバルな社会」という言葉だ。これは近年になってよく言われる言葉だが、それについて深く考えたことはなかった。対話の中で藤村さんの言った言葉が印象に残っている。藤村さんによるとグローバルな社会の中で、外国人と触れ合うことは、今の私たちにとってとても大切なことだという。最近「グローバル社会」と共に「異文化理解」という言葉をよく聞くようになった。この言葉がよく言われるようになったことや藤村さんの話から、私は異なる文化や考え方をもった人々と交流することで自分の生き方や考え方を客観的に見つめなおすことの大切さを学んだ。

また笹川平和財団や日本財団は海洋関連のことにも力を入れているため、海のことについても詳しく話をしてくださり、自分の知識を広げることができた。私はこの前ニュースにも取り上げられたオーストラリアのグレートバリアリーフについて質問した。現在グレートバリアリーフのサンゴ礁は壊滅的といっているほど破壊されているそうだ。そこで私は、なぜグレートバリアリーフのサンゴ礁は破壊されているのかと質問した。すると「港を造ることによってサンゴ礁は破壊されているのです。」と講師の方が言った。とても思いがけない答えだった。確かに日本も高度経済成長の頃、海を犠牲にして発展を続けてきた。しかし世界有数の観光地であり、指折りの多様な生物の宝庫でもあるグレートバリアリーフを守る術は無いのかと考えた。私はこの質問で、社会の発展と環境保全の両立の難しさを知ることとなった。

②企業訪問

私たちの班は企業訪問で三鷹の国立天文台を訪れた。私は宇宙について多くの疑問を持ち、知りたいことがたくさんあったのでこの企業訪問を楽しみにしていた。国立天文台に着くとそこは思ったよりひっそりとしていて、都会から離れた郊外にあった。施設の方に挨拶をし案内が始まると、私は自然が多いことに少し驚いた。自分は森林の中にいるのかと勘違いするくらい木が国立天文台の周りに生い茂っていた。こういう場所は空気が澄

んでいないと駄目なのかもしれない。

いよいよ重力波の研究所に入れることになった。日本で最先端の宇宙研究所に入るとあって気持ちは高ぶっていた。研究所に入ると、外と違って空気はひんやりしていた。ほとんどの実験器具は地下にあり、どれも今までに見たことの無いものばかりだった。まず重力波について説明された。重力波とは質量のある物体が移動することで時空の歪みが変わり、その変化が光速で波となって伝わっていくときの波のことをいう。次に地下に降りて重力波の実験装置を見させてもらった。その装置はとてつもなく巨大で、全長約300mにもなるという。実際に装置を見てみると太い管が目も届かないところまで伸びていてとてつもなく目を見張るものだった。

その後、私たちは天文について研究している秋山先生にいくつかの質問をした。その中で最も印象に残っているのは「天体を研究する上で一番大切なことは何ですか。」という質問に対する返答だった。その質問に対して「偏見や固定観念にとらわれないことが一番大事。」と秋山先生は答えた。さらに秋山先生は、学び続ける意欲があれば新しい発見や可能性を見つけることができると言う。私はその話を聞いてとても共感した。実際自分自身もある程度知識を身に付けたら学ぶことを止め、新しいことに目を向けられなくなりそうだ。だがそうなってしまえば先生の言う通り、新しい発見や可能性を見つけることは難しくなってしまうと思う。だから私は生涯知的探究心を持ち続けていこうと思う。

③東京大学

東京研修2日目、いよいよ東京大学のオープンキャンパスの日になった。東京大学は私の志望校だが、正直それに見合った勉強ができていない。それで実際に東京大学に行ってみて勉強に対する意欲を上げたいと思っていた。

赤門の下を通るとそこにはオープンキャンパスに来ている多くの学生らしき人々がいた。そしてまず最初に向かったのが工学部の説明会だった。説明会が行われる会場に着き、中に入ってみると、そこは2000人ほどの人が軽々と入るほど大きな講堂だった。

東京大学工学部学部長の光石衛による説明会が始まった。光石さんは最新型の医療ロボットを開発したという実績を持っている。そのロボットは1ミリにも満たない細い血管を遠隔操作で縫うことができるのだという。また光石さんは高校時代から機械工学という一つの分野に限らず学んできたそうだ。そしてそのような経験の積み重ねがあったからこそ、夢のようなロボットを実現できたのだという。光石さんは私たちに、一つの分野にこだわって学ぶのではなく、多くの分野を学ぶことで物事を見極める力をつけてほしいと語った。

その後、コンピュータ制御の講演にも行った。講演を受けてみると内容はとてもおもしろく、プログラミングに興味を持つようになった。

この東京大学のオープンキャンパスを通して、このような良い環境で学びたいと改めて感じた。また大学に向けてというだけの勉強ではなく、将来に活かせる勉強をしていこうと思う。そして得意な理系科目に限らず苦手な文系科目も深く学んでいきたい。

